

2) 乳房緊満後投与例の効果

投 与 群	例数	効 果 判 定 例 数		
		著 効	改 善	不 変
		有 効		
両性ホ・デポ注 キモタブ錠併用	11	7(63.3%)	2(18.1%)	2(18.1%)
		(81.9%)		
両性ホ・デポ注 のみ	7	3 (43%)	2(28.5%)	2(28.5%)
		(71.5%)		
非授乳無処置群 (対照)	10	1 (10%)	2 (20%)	7 (70%)
		(30%)		

3) 乳房緊満後の投与例の内、有効例に就いて症状の改善開始から消失までの平均日数

投 与 群	例数	症状の改善開始から消失迄の平均日数	
		緊満腫脹	乳房疼痛
両性ホ・デポ注 キモタブ錠併用	9	2.2日 ～ 3.5日	1.8日 ～ 2.8日
両性ホ・デポ注 のみ	5	3.1日 ～ 4.2日	2.2日 ～ 3.5日
非授乳無処置群 (対照)	3	3.5日 ～ 4.7日	3.0日 ～ 3.7日

以上の如く両性ホルモンデポ・キモタブ錠併用群が最も有効であり効果発現も早かった。

又、特別の副作用は認められなかった。

〔作用機序〕尚不明な点が多いが恐らく下垂体抑制作用に基く抗プロラクチン作用による乳汁分泌抑制と、プロメラインの蛋白分解作用、抗炎症作用、抗浮腫作用による乳房鬱積の改善によるものと考えられる。

206. 乳汁分泌と産褥子宮に対する syntocinon の影響について

(群馬大) 高沢 勝英, 飯島 協子

合成 oxytocin の経鼻的投与が乳汁分泌に影響することは以前から幾多の報告がある。しかし経鼻的投与の産褥子宮への影響についての報告はみられないので、分娩後の乳汁分泌と産褥子宮復古に対する影響を検索する目的で、分娩直後から退院まで毎日1回 syntocinon 0.5単位点鼻したもの30例、1単位点鼻したもの60例、合計90例、対照として無投与群20例、麦角剤投与群60例についてその効果を比較検討した。

(1) syntocinon 投与群は産褥子宮退縮が無投与群より好結果を示し、麦角剤投与群に比して、やや良好のように思われる。悪露の性状も無投与群に比して好結果

を示した。

(2) 乳汁分泌. syntocinon 投与群では産褥第1日ないし第2日目から点鼻後10～40分後に乳房腫脹感を認め始め、産褥日数の経過とともに点鼻後腫脹感を感ぜずる例数が増加し、時間が短縮する例数が増加する傾向がみられた。乳汁量は測定しなかつたので不明である。

(3) syntocinon 投与群では鬱滞性乳腺炎、乳頭損傷が syntocinon 無投与群より少なかった。

(4) syntocinon 点鼻による副作用は認められなかった。

207. 人乳の酵素に関する一考察

(日赤本部産院) 三谷 茂, 中嶋 唯夫
柄沢 和雄, 吾妻 博

新生児及び未熟児の栄養に関して、数年来人乳栄養を中心として再検討を実施しつつあるが、今回は初乳の成分に就いて、乳汁組成の面からの検討を併せて、主として人乳の酵素学的な追及を試みた。酵素の中で磷酸エステルの分解、合成の触媒系について、骨格形成、筋肉に於ける代謝作用及び乳汁分泌等に関する、無機燐、アルカリホスファターゼ及び酸ホスファターゼ値を Fishe-Subbaraw 法にもとづき測定した。採乳時間は午前9時より午前10時迄とし、手搾りにて採乳した新鮮人乳を直ちに単独試料として分析した。対称は合併症なき満期正常産褥婦、晩期妊娠中毒症合併満期自然分娩を遂げた褥婦、高年初産褥婦、早産未熟児娩出褥婦である。測定方法、灰分は電気マッフル炉にて灰化秤量した。カルシウムは業会協定法により、無機燐は Fishe-Subbaraw 法により測定した。アルカリホスファターゼはpH10.9、酸ホスファターゼ値はpH5.0の基質緩衝液を使用し、Fishe-Subbaraw 法によるも試薬は sulfon 試薬を使用し、Shinowara-Jones-Reinhart 単位にて値を求めた。灰分及びカルシウムは分娩後の同日日数の人乳による混合試料による値であるが、灰分に含まれる成分は無機塩のほかには有機燐酸塩、蛋白質及びレシチン等の有機化合物に由来する物質であると云われ、大部分は可溶性無機化合物であるが、カルシウム及び燐の一部は不溶性であり、蛋白質と化合していると云われている。我々の測定値を示すとスライドの如くである。スライド①、灰分は日数の経過と共に低下し、カルシウムも又、日数の経過と共に低下するが、50日目頃より初乳値に近づく傾向がある。無機燐について検討を行うとスライドの如く、スライド②③、無機燐は合併症なき満期正常産褥婦及び晩期妊娠中毒症を合併し満期自然分娩を遂げた褥婦では、初乳よ